Oasis meets Books

オアシス・ミーツ・ブックス

本のあるオアシス　本のある人生

2025年4月 vol.29 Plus

医療法人 隆星会

理事　木下 利彦

零式戦闘機

吉村 昭

推薦図書の依頼を受け、さて職員の皆様に何を推薦すべきか迷っておりましたが、若い方が多いので、本邦の近現代史に関する著作を紹介しようと考えました。

第二次世界大戦はよくご存知の事と思いますが、たいていの方は日本が無謀に仕掛けた戦争で、中国で残虐な行為を行い、一方的に間違った戦争であったと考えておられると思いますが、必ずしもそうではない側面があったのです。欧米、特にアングロサクソン系の白人による有色人種差別に毅然として戦いを挑んだのが、我が日本民族であったわけです。

米国では多くの日本人が戦前、米国西海岸に移民として生活をしておりましたが、米国の有色人種排他思想により、戦争前に強制的に西海岸奥地の不毛の砂漠地帯に移住させるという酷い事件があったのです。米国が日本に戦争を仕掛けたと考えられる側面があったのです。20世紀初頭は世界中が帝国主義の嵐の中で、食うか食われるかの環境下、唯一の有色人種である日本人は本当によく頑張ったのです。中国や韓国に攻め入ったのも日本が生存するためのやむを得ない戦略であったのです。日中戦争真っ只中で、航空機の重要性にいち早く目覚めた日本海軍がゼロ戦を開発したのです。

本著はゼロ戦の開発秘話です。太平洋戦争前夜から終戦まで、日本海軍の主力戦闘機として戦い抜いた「零式艦上戦闘機」の物語であります。

昭和11年（紀元2596年）に作られた戦闘機はゼロ戦の一代前の九六式艦上戦闘機です。最高時速450キロと世界最高速のスピードを誇り、遅れていた日本の航空機製造技術を世界水準に高めた航空機です。堀越二郎が主任設計官で1000機生産されました。しかしながら航続飛行距離が短く、中国本土奥地まで攻め入ることが出来ないため、戦線を打開できずに困っていました。

そこで海軍が、十二試（昭和12年度試作）艦上戦闘機計画要求書を策定しました。最高速度500キロ以上、上昇力は高度3000メートルまで3分30秒以内、航続力巡行にて6時間以上と九六式戦闘機を遥かに凌ぐものを要求しました。当時の水準からすると、九六式を遥かに上回るほとんど不可能とも思える数字が並べられていました。そこで主任設計官の堀越は、とにかく機体の軽量化と空気抵抗の軽減に邁進しました。当時、大阪の住友金属で軽くて強度の優れた超々ジュラルミンが開発されたという情報を入手し、エンジンは自社の三菱製ではない中島飛行機製作所で軽量で950馬力のものが開発されたという情報を得て、いわゆるオールジャパンの体制で海軍の無謀と思われた要求を満たす戦闘機を作り上げたということです。昭和15年7月に海軍に採用されました。昭和15年は紀元2600年であり、末尾のゼロをとって、零式艦上戦闘機と命名されました。欧米の技術者が全く想像していなかった能力を有する戦闘機であったわけです。最初、アメリカ軍は、ゼロ戦を見つけたら戦わずに逃げろ、と指示していたほどです。第二次大戦前半はゼロ戦のおかげで勝ち進むことが出来たのです。

しかし油断は大敵ですね。ゼロ戦を超える次世代の戦闘機を生み出さなかったことが、ゼロ戦の性能に慢心したことが戦争後半の敗戦につながってしまいました。アメリカがゼロ戦を超える3000馬力の戦闘機ロッキードP38などを戦場に投入し、戦況は一変しました。休まずに慢心せずに歩み続けることの重要性を痛感しますね。

今、アメリカはトランプが大統領が返り咲いて、MAGA(Make America Great Again)が声高に叫ばれていますが、わが国も当時世界一のゼロ戦を開発できたほどの高い技術を持った国であるという矜持をもって、Make Japan Great Againで行こうではありませんか！！

Oasis meets Books

オアシス・ミーツ・ブックス

本のあるオアシス　本のある人生

2025年4月 vol.29 Plus

医療法人 隆星会

理事　木下 陽介

たゆたえども沈まず

原田 マハ

私は、昔から歴史が大好きでした。

いまでも平野の歴史、日本の歴史、世界の歴史すべてにとても関心があります。

学生時代から歴史の教科書に載っているような年号や出来事を丸暗記するようなことも全く苦ではありませんでした。しかし、大人になって井沢元彦の『逆説の日本史』シリーズを読んでから歴史に対する考え方が一変しました。

また、現代社会を理解し、よりよく生きるためのヒントが歴史には散りばめられていることを知り、より歴史に触れることが好きになりました。

当シリーズで井沢元彦さんが終始訴えておられるのは、いまの日本で多く語られる歴史があまりに資料第一主義によったものであり、古来から日本人が有する、日本人古来の「言霊や穢れ、怨霊」といったものの影響等を軽視しすぎているということです。

なぜ奈良に大きな大仏が建てられたのか、なぜ本能寺の変が起きたのかといった日本の歴史の7不思議に挙げられるような事象についても、非科学的・非合理的ではあるが、日本古来の思想や日本人の感性に照らして考えるとみえてくるものがあるということを教えられる本です。

日本人の多くが、自身は無宗教であると自覚していると思いますが、生来言霊や怨霊に対する信仰を持っていて、時にその力はとてつもなく大きな出来事を引き起こしうるということ、より抽象度を高めていうと、人間が引き起こすことのすべてが合理的な考えや行動の結果ではないということを理解して、現在や未来についても考えることが歴史を学ぶ意義だと思います。

前置きが長くなりましたが、そういった訳で、私は普段読む小説もどうしても歴史的なものに偏ります。ここでは、その中でもなるべくたくさんの方に興味を持っていただけそうな一冊を選びました。

それが原田マハさんの「たゆたえども沈まず」という本です。

オランダのポスト印象派の画家であるフィンセント・ファン・ゴッホが売れない画家であった時代に実の弟であるテオが必死に兄を支え、兄の成功のために生きる様を描いた小説です。

そしてこの本にはもう一人重要な登場人物がいます。

それが、日本人である林忠正です。

ちなみにあまり知られていない話ですが、ゴッホを含めこの時代の西洋の画家たちは、日本の美術や文化に大いに刺激や影響を受けていたそうです。

林忠正はいわゆる美術商ですが、ながらく日本では浮世絵など日本の美術品を海外に持ち出し巨万の富を得た国賊として評価されることが多かった人物です。

また少し話がそれますが、みなさん坂本龍馬はご存知だと思います。

しかし、坂本龍馬は戦前にはほとんど知られていませんでした。

彼を有名にしたのは、歴史作家の司馬遼太郎と言われています。それまであまり知られることのなかった坂本龍馬にスポットをあて、彼の功績を大いに広めたことで、いまでは龍馬は誰もが知る英雄の一人となっています。しかし、ごく最近では、龍馬の功績に疑問符を投げかける歴史家がたくさん現れています。

ここで大切なことは、その人物や事件の評価は時代によって変わりゆくし、見る人の立場によって全く異なるということです。そして、いまの歴史解釈も時代が経てば大きく変わりうるものだということです。

話を林忠正に戻しますと、彼も一時期は国賊と評されていたのですが、いまでは日本の美術のレベルの高さやその独自性を世界に知らしめ、その価値を高めた日本美術界の最大の功労者の一人であるという評価がなされているのです。

当時の日本では、浮世絵はあまりにありふれており、ちり紙程度に扱われていたようですが、芸術の都パリを中心に世界では浮世絵は相当な人気を博し、相当高額で取引されていたのです。そこに目をつけた忠正の視野の広さ、商才には感服させられます。

さて、小説では、一向に売れない画家であるゴッホを、弟が自らの人生を顧みず懸命に支える様が描かれています。兄が次第に病的に落ち込んでいったり、自身に愛する人が現れて苦悩する弟の人間的な描写にこちらも胸が苦しくさせられます。

最終的に、ゴッホは生前に名声を得ることは叶いませんでした。

いま、世界中でゴッホが知られているのは、無名の弟の献身と一人の日本人画商の貢献が影にあることはあまり知られていません。

歴史上の有名な大人物が、皆生きている間に賞賛を得ていたわけではありません。

むしろ長らく歴史の表舞台に登場しなかったり、偏った見方によって過小に評価されているようなケースの方が多いのかもしれません。

そんな曖昧模糊で捉えようのない歴史にロマンを感じずにはおられません。

ぜひこの本を手に取って、壮大なドラマに心を躍らせてください。